

そういう、かつての留学生に対して、研究上のサポートを大学として行ってきたか、というと、指導教官が個別的に行うことはあっても、大学として組織的に行っているとは言い難い状況であります。親切的な指導教官、丁寧な指導教官に恵まれた研究者はそれでもいいのですが、或いは手紙を書くのを面倒がるような怠惰な指導教官であった場合、決してサポートは期待できないはずで

先ほども申し上げたように、国際日本学専攻では、海外の「日本学」の成果を取り入れるとともに、海外に対して研究成果を発信することを設立の大きな目的としていますが、さらにかつての留学生だけでなく、広く海外の日本研究者をサポートしたいとも考えています。どの程度のことができるのか、甚だおぼつかないではありますが、支援するにあたって、色々なことを知っている必要があります。特に近年では先ほど触れた議会図書館のように、ホームページに情報を載せて提供する、インターネットの利用が早くて便利なのだと思いますが、そういう事も考慮した上で、

①海外で日本研究を行う上での困難な点（資料、データベース、情報など）

②海外での日本研究のネットワークの状況

③海外の研究機関の状況

などについて、是非とも把握しておきたいと思います。また海外の研究者が日本の研究機関や研究者に対して、どのような要望を持っているのか、などについてお聞きしたいと思います。「新しい日本学の構築のために」と銘うっていますが、本日はこのような点についてお話して頂くつもりです。勿論これ以外の点に話が及んでも結構でございます。

以上で私の話は終わりと致します。

社会言語学と異文化コミュニケーション

ヘレン・マリオット

ただいまご紹介いただきました、モナシュ大学のヘレン・マリオットでございます。

初めに私の研究について簡単にご説明してから、私と日本との関わりについて少しお話ししたいと思います。

私は、主に異文化コミュニケーションについての研究に30年近く携わってきたのですが、この研究は、ミクロ社会言語学の視点から行ってまいりました。最近、学生の留学経験の実状や成果に興味を持つようになり、初めは、オーストラリアの高校生で、交換留学生として日本で学んでいる学生を調査するプロジェクトを進めてまいりましたが、現在ではこのテーマを発展させて、オーストラリアで学ぶ日本人の留学生を調査しております。また、同時にオーストラリアに住む日本人母語話者の日本語が英語との関わりの中でどのように変化していくのかについての研究も行っております。

私は3年前、ここお茶の水女子大学で3ヶ月間の特別客員研究員というポジションをいただくという、幸運な経験を致しまして、その時、社会言語学のコースを担当する機会にも恵まれました。そういうわ

けで、皆さんの中にも、私のバックグラウンドや研究についてご存じの方がいらっしゃるかと思います。私は皆さんもよくご存知のネウストプニー先生の異文化コミュニケーション研究に触発されまして、1970年代にメルボルンに一時滞在していた日本人女性の英語の習得について、社会言語学的な立場からのリサーチを行いました。そして、ドクター論文ではこれに続いて、オーストラリア人と日本人のビジネスマンが英語で話す時のインターアクションのプロセスを研究いたしました。この時、私はメルボルンと東京でバックグラウンドインタビューを数多く行っておりますが、主要なデータについては実際の場面をビデオで撮影し、そのインターアクションを細かく分析しました。この中にはフォローアップインタビューも含まれています。このように私の研究は主に質的で詳細な分析によって、成果を上げてまいりました。私は学生たちにも、いつも、できる限り自然なデータを集めるように、と言っております。ロールプレイを使ったようなテクニックは、私の研究しているテーマに関しては、全く意味を持たないと思うからです。

私の研究方法は非常に社会言語学寄りのものですが、研究の方向としては第二言語習得の研究分野とも重なり合っております、これは伝統的には応用言語学の分野に含まれます。私はオーストラリアにおける日本語教育の様々な側面に興味を持ち、1990年代の初め、二人の同僚とともに政府主催のある大きなプロジェクトに参加いたしました。これは、オーストラリアの主要第2言語である日本語教育が、初等教育・中等教育・高等教育・成人教育のそれぞれのレベルでどのようになされているかを研究するものでした。

次にお茶の水女子大学で以前コースを担当した時のことについて、少しお話しさせていただきたいと思います。私の日本語力の不足から、クラスは英語で行いましたが、学生たちとのやりとりの中では、時々日本語と英語が混ざりました。日本の大学では、最近ますます英語の使用に重点が置かれるようになってきたと聞いております。私が授業を英語で行ったことは、その意味では貢献できたと思いますが、学生も私も多少つらい面もあったように思います。私は個人的には講義形式ではなく、少人数のクラスでお互いに意見交換しながら進めていく授業が好きなのですが、驚いたことに、私の授業には非常にたくさんのお学生さんが参加して下さって、講義形式で授業を行うことになりました。しかも、学生さんが私の授業を聴講して下さったのは必ずしも単位のためではありませんでした。これは大きな文化の違いです。オーストラリアで同じことが起きるとはとても思えません。

ここ、お茶の水女子大学の日本語教育コースは非常に熱心で優秀な学生さんが多く、私も日本で行われている研究、特に第二言語習得について学ぶことができますし、私自身の研究もスタッフや学生さんと協力して行うことができ、大変恵まれた環境にあります。このようなことを考えますと、学生やスタッフが海外の大学との間で交流を行うということは、大変価値のあることだと思います。海外経験と言いましてもこの場合限られたものではありませんが、異なる教育のコンテキストを観察し、その中に身を置くことができるということは素晴らしいことだと思います。

これは個人レベルのことですが、私にとっての「グローバル・ネットワーク」は、日本・アメリカ・

ヨーロッパ・香港などの学会に論文を提出することから始まりました。そして海外やオーストラリア国内で各国の研究者の方とお会いし、ごく最近ではお茶の水女子大学で研究を行い、授業を一つ担当させていただくまでになりました。現在では早稲田大学の宮崎里司先生と共同の研究プロジェクトに参加しております。これも一つの大変重要な国際協力だと思います。

私が日本を訪問する時の大切な目的の一つは、研究論文を手に入れることです。大学の紀要のコンピュータ化は現在ではどの程度まで進んでいるのでしょうか。以前お茶の水女子大学におりました時、国立国語研究所にまいりまして、私の関心のある分野の研究論文が掲載されている各大学の紀要をコピーしようとしたしました。ところが研究所の図書館には所蔵されていない紀要がいくつもございます。その時、お茶の水女子大学の学生さんが私のために、各大学に連絡をとり、私が必要としていた紀要を一つ、一つ、取り寄せてくださいました。この場をお借りして、お礼申し上げたいと思います。またこの時点では、私の知る限りにおいてですが、紀要の中の個々の論文タイトルはどこにもリストアップされておりませんでした。大学の紀要というのは日本の研究を代表するものですから、いかに簡単に参照できるかということは、海外の研究者ばかりでなく、日本の研究者にとっても大切なことなのではないでしょうか。全部の紀要が、オンラインでも読めるようになることを期待しております。

以前お茶の水女子大学にいて、大変よかったことがもう一つありまして、それは大学院の学生さんと話をするようになって、私のリサーチアシスタントを何人かの方々をお願いできたことです。これは本当に助かりました。この時手伝ってくださった方々にも、ここで、改めてお礼申し上げたいと思います。

最後に、大学院生の方、また、研究者の方々に申し上げたいのですが、興味を持てるトピックや分野が見つかったら、それを徹底的に追及して行ってください。これは具体的に言いますと、

- ・ 関連した文献を可能な限り収集する。
- ・ 精緻な手法でデータ収集を行う。
- ・ 自分の研究の中で分かったことを、日本で、また海外で発表していく。
- ・ 自分と同じ分野の研究者を、これも日本で、また海外で見つける。

というようなことになります。これらの一環として、時に海外で学んだり、研究者同士が行き来をしたりするということは、研究者としてばかりでなく、個人的なつながりを形成するという意味でも、価値のあることだと思います。

最後になりましたが、お茶の水女子大学と私とのつながりをますます強めてくれた、このような機会を与えていただきましたことを、心から感謝いたしまして、お話を終わらせていただきます。